煉獄をめぐる黙想

――中世人にとっての死――[1)]

片　山　　寛

はじめに

死とは何か。人間は随分昔から，おそらくは私どもの想像も及ばない太古の昔から，死について考えてきたと思われます。人間のあらゆる宗教は，人間が死について考えたということにその遠い淵源を持っているに違いありません。いや，宗教 religio（敬神）だけでなく，芸術や文学などを含めてすべての文化は，そもそも人間が死すべき者であるという，その一点から始まったのだと言えないでしょうか。

けれども他方，死について考えることができない，どうしても死を理解することができないということ，それもまた人間の姿であったのです。愛する人に死に別れたとき，私たちは死を本当に理解できるでしょうか。ルネサンスの詩人ペトラルカ Francesco Petrarca 1304-74 は，心から愛する女性や愛する人々を1348年のペスト（大ペスト）で失ったとき，次のように書いています。

「わざわいだ，私は何を耐え忍ばなければならないのか。いかにすさまじい責め苦が，運命によって私の前に立ちふさがることか。私は目の前に，世界がその終りに向かって突進してゆく時代を見ている。そこでは，私の周囲で老いも若きも群れをなして死んでゆく。安全な場所はもはやなく，私に開かれた港もない。救いに憧れても，希望はないように思える。目をいずこに向けても，無

1) この論文は元来，「キリスト教史概論」の授業の原稿として書かれたものに，今回全面的に手を入れたものである。

数の葬列しか見えず，それが私の視界をぼやけさせる。教会は嘆きの声で反響し，死者たちの棺台で満たされている。身分には関わりなく，高貴の人々も死んで，卑しき民と並んで横たわる。魂はその最後の時を思い，私もまた自らの終りの日を指折り数えなければならぬ。ああ，愛する友らは死んでしまった。心地よき会話も過ぎ去った。愛らしい顔の数々が突然色あせてしまったのだ。地上はすでに墓にするにも手狭になってしまった。……私の頭すら，どこにも隠せはしない。大海も陸地も隠れた洞穴さえも，避難者に安全を与えることはない。なぜなら，死はすべてに打ち勝つからだ。死は恐怖と共に来る。そしてどのような隠れ家も安全ではないのだ」[2)]

死は理解できないのです。人はなぜ死なねばならないのか。しかしまた人はそれでも，死を何とか理解しようとせずにはいられないものでもあります。今日は，私が専門にしております中世ヨーロッパにおいて，人々が死をどのように考えていたのか，どのように理解しようと試みたのかを，ご一緒に考えてみたいと思います。

1．万聖節前夜

10月31日は「ハローウィーン」（万聖節前夜）で，アメリカではよくこの晩に，カボチャをくりぬいてつくったお化け提灯を，窓際に飾ったりします。この習慣は今ではドイツにまで広がっておりまして，私は何年か前にドイツに滞在しているときに，この時期，オレンジ色のカボチャが沢山道端で売られているのを見て，驚いたことがありました。アメリカでは，子どもたちはこの晩，お化けとか魔女とかの扮装をして家々を回って，お家の人が玄関に出てくると Trick or treat！（いたずらかもてなしか）と叫ぶことになっています。すると家の人々はいたずらを恐れて，チョコレートとかキャンディをくれるという寸法であります。

最初にこのお話をいたしますのは，実はこのハローウィーンというお祭は，

2) Francesco Petrarca, *Epistola Metrica*, I, 14, 1 (Ad se ipsum), 1-14; 30-34, cf. K. Bergdolt, *Der Schwarze Tod in Europa,* S. 101.

アイルランドのケルト族の古いお祭に起源があると言われておりまして，サムハイン Samhain という死の神の到来をお祝いする祭であったらしいのです。死神が来るのをお祝いするというのはちょっと奇妙な感じもいたしますけれども，それは同時に冬（当時は冬から新年でした）が来たのを祝うことでもありました。そしてこの晩には ── これが大事なことですが ── 死者たちの魂が家に帰ってくると信じられていました。子どもたちが仮装をして家々を回るという風習は，これと結びついています。そして人々は，死者たちのいたずらや災いを恐れて，これをもてなさなければならない，と信じていたらしいのです。

キリスト教がヨーロッパで支配的な信仰になる中で，このサムハインの祭はアイルランドのキリスト教に取り入れられて，11月１日の万聖節（All Saints' Day, Allhallows）の前夜祭（Allhallows' Even → Halloween）となりました。そして更に，アイルランドからアメリカに移民した人々を通じてアメリカに伝えられて，今日に至っているわけです。

２．死後の世界の近さ

ここで私は，ヨーロッパ中世の人々が，「死」ということをどんなふうに考えていたのか，あるいは「死の向こうの世界」，「あの世」というものをどんなふうに考えていたのかについて，お話ししようとしているのですが，正直に言ってそれは非常に複雑で，時代や地域によっても多様でありまして，到底この小さな論文で述べられるものではありません。そこには死についてのキリスト教の教えと，ケルトとかゲルマンなどの古い信仰の観念などが入り混じっていて，判然とは区別することもできません。

しかしきわめて大雑把に言って，中世ヨーロッパの人々は，キリスト教の本来の教えよりも，死者たちの世界というものをずっと身近に感じていたということは言えるかもしれません。死後の世界はこの世と完全には断絶してなくて，つまり天国や地獄のように隔絶した場所ではなくて，平面上で地続きであるような，つまり森の奥深くかあるいは海の彼方のような場所であって，時々はそこから死者たちがこの世に戻ってくると思っていました。ゲルマンやケルトの

人々は，キリスト教が入って来る以前は，ある意味で，死者たちと共に生きていたのです。それは彼らの祖先崇拝の信仰と関係があります。そのような，キリスト教にとっては異教的な死後の観念が人々の間に広く残存しておりまして，キリスト教会はそのような人々の死後についての観念と戦い，基本的には斥けつつも，部分的にはそれを受け入れ，習合していったということができます。中世ヨーロッパの人々にとって，ちょうど昼と夜のように，あるいは意識と無意識のように，教会の教えと古い異教の教えが裏表に重なり合っていて，その重なりの緊張関係の中から様々な新しい思想や神話や観念が生まれてきたと言えるように思います。

３．煉獄 ── 時間のある世界

キリスト教の教えがヨーロッパ中世の人々の生活の隅々にまで浸透し，彼らの生活をあらゆる意味で支配するようになったのは，12世紀頃だと言われます。それは特別な世紀でした。今日まで続いておりますキリスト教の様々な儀式や習慣のうち，数多くのものがこの12世紀に始まった，あるいはこの時期に西欧社会に定着したと言えます。それはたとえば，教会で結婚式をする習慣とか，教区教会制度とか，聖職者独身制度（グレゴリウス改革）とか，様々なものがあります。教会の尖塔に鐘がとりつけられて一日の時刻を告げるようになったのも，およそ12世紀のことです。

ここでの主題であります「煉獄」purgatorium という，人間の死後の世界として三つ目の世界の存在が定着するのも，12世紀から13世紀にかけてのことです。煉獄というのは，天国と地獄の間に第三の場所があって，死んでいきなり天国に行くほど善い人間でもなく，かと言って永遠に地獄で苦しみ続けるほど悪い人間でもない，言うなれば白でも黒でもない灰色の人々が，死んだのちに行く場所だとされています。

それは，本来のキリスト教の教え（世界観）にはなかったものでありまして，聖書の中には出て来ません。聖書にあるのは，天国と地獄だけであり，人間は死んだ後，神さまの裁判といいますか審判を受けて，それぞれの生前の所

業の報いとして，天国と地獄のどちらかに行くのだと考えられておりました。

煉獄というのは天国でも地獄でもない，第三の場所であります。そして煉獄という存在を考えるときに大事なのは，そこには時間があるということなのです。天国と地獄はそれぞれ永遠の世界でありまして，時間がないというよりも，時間を越えた世界です。そこではすべてのものが永遠に続く。天国においては喜びが，地獄では苦しみが永遠に続く。そこでは，いずれにしても永遠の世界ですから，時間が支配しているのではなくて，神様との距離がすべての尺度になっています。天国においては，神さまとの近さが，地獄では神さまからの遠さが尺度になって，すべてのものが位置づけられています。ところが煉獄においては，魂は時間の中にあって生き続け，変化をし続け，より低い段階から高い段階へと動いていきます。その意味では煉獄は現世の続きであり，現世と同じ平面上にはないものの，何らかの関係のある世界として考えられていました。つまり煉獄は，先ほど申しましたゲルマンとかケルトの（地続きの彼方にある）死後の世界と，キリスト教的な天国・地獄の入り混じった世界だったのです。

「煉獄」purgatorium という言葉は，ラテン語の purgo（purus ＋ ago），つまり「洗い清める」「純粋 pure なものにする」という言葉から来ているのですが，そこでは死後の魂が洗い清められて，浄化されてゆくのです。ですから，「浄罪界」とか「浄罪天」と訳されることもあります。そして魂が十分浄化されて，天国に入るにふさわしいものになると，魂は煉獄をいわば卒業して，天国へと昇っていくと考えられていました。つまり，煉獄というものは，死後の魂が一定期間そこに滞在して，生前の罪を洗い清める場所であり，始まりと終りがある世界，入り口と出口のある世界，成長と発展のある世界であります。煉獄は，この世と同じく「過渡的な世界」「過ぎ行く場所」なのであります。人間の死後にいきなり永遠の世界があるのではなくて，中間的な世界，時間的な世界がある。いわば一種の敗者復活戦のようなものがある，というのが煉獄の基本的なイメージです。

この教えは，西欧中世に特徴的なものでありまして，同じキリスト教でも，ギリシア正教にはありません。プロテスタント教会もその聖書主義のゆえに，

聖書にはない「煉獄」を否定しました。よく煉獄の聖書的根拠として，第一コリント３章10節から17節が挙げられるのですが，それは私たちの生前の所業が終末の裁きに耐えられず，自分自身（神の家）が燃え尽きても，「ただ，その人は，火の中をくぐり抜けて来た者のように，救われます」（15節）と言う逆説的な神の救いが述べられているだけで，「煉獄」というひとつの世界を暗示するものは何もありません[3]。

４．ダンテ『神曲』における煉獄

煉獄というものに，最終的に明瞭なイメージを与えたのは，ダンテ（Dante Alighieri 1265-1321）の『神曲』という文学作品でした。『神曲』は，主人公のダンテ自身がヴェルギリウス（ヴィルジリオ）というローマの詩人に案内されて，地獄，煉獄，天国の三つの世界を旅してゆくという，一種の巡礼物語なのですが，その中では煉獄は，ひとつの大きな山としてイメージされています。『神曲』の世界では，ちょうど地上のエルサレムの真下に深いすり鉢状の地獄があって，地球の中心にまで達しています。そしてその中心をくぐりぬけて地球の反対側にまで登っていくと，そこには巨大な山がそびえていて，それが煉獄の山であります。エルサレムとは，ちょうど地球の反対側でありますから，当然南半球に属しておりまして，現在の世界地図では南太平洋のタヒチ島の南2000キロほどの海上になってしまいます[4]。その煉獄の山は（下の絵にありますように）ほぼ円錐形をしておりまして，その周囲に二つの台地と七つの円環が取り巻いています。罪人の魂はそれぞれの場所で自分の生前犯した罪の償い

---

3) 聖書の中では，この浄化の火（I Cor. 3, 10-17）を暗示する記事の他，来るべき世での罪の赦しの暗示「人が犯す罪や冒涜はどんなものでも赦されるが，“霊”に対する冒涜は赦されない」（Mt. 12, 31-32），「金持ちとラザロ」（Lk. 16, 19-31），死者たちのための贖罪の祈り（マカバイ下 12, 38-45）などが煉獄と関係づけられて語られることがあります。

4) とはいえその当時，人々は地球を今よりもずっと小さいものと考えていたことも確かでありまして，ダンテはエルサレム（E35）を中心にして，スペインのエブロ川（W3）とインドのガンジス川（E73）まで（経度差 76 度）で地球の半球にあたると考えていました。*Divina Comedia*, Purg. 27.

として苦しみを負いながら，次第に重荷を下ろして軽くなっていきます。最後の第七の円環では猛烈な炎が燃えていて，魂はここで炎の中をくぐって，最後まで残った地上の罪を焼き尽くさなければなりません。そしていよいよ煉獄山の頂上に登ると，そこが地上の楽園でありまして，今や軽くなった魂は，そこから更に天上の世界，星々の世界を目指して昇ってゆくのであります。

ドメニコ・ディ・ミケリーノ「ダンテ，『神曲』の詩人」1465年

煉獄の構造 をダンテ『神曲』によって説明しますと，次のようになります。

煉獄前域　煉獄山の麓では，古代随一の道徳家小カトーが，やって来る死者たちを見張る。

第一の台地　破門者　…教会から一度破門され，臨終に際して悔い改めた者は，煉獄山の最下部から贖罪の道を登ることになる。

第二の台地　遅悔者　…生前に信仰を怠って，臨終に際してようやく悔い改めた者はここから登る。

ペテロの門　…煉獄の入口。白，紫，赤の三段の階段（悔い改めの三段階，痛悔，告悔，贖罪をあらわす）を上り，天使が金と銀の鍵で開く扉を通って進む。

第一の環道　高慢者　…生前，高慢であった者が重い岩を背負い，（高慢の償いとして）腰をかがめる。地上の名声の空しいことが語られる。

第二の環道　嫉妬者　…生前，嫉妬に狂った者が，瞼を針金で縫いつけられて，かつて羨望のまなざしで見たことの償いをしている。瞼の間からは絶え間なく涙が流れ出る。

第三の環道　憤怒者　…怒りの罪を悔い改めるべき人々が，濃い煙の雲の中でさまよいつつ祈っている。

第四の環道　怠惰者　…怠惰は善への愛がないことから生じる。この環道では，怠惰であった者たちが立ち止まることもせず，愛に鞭打たれてひたすら走っている。

第五の環道　貪欲者　…貪欲の罪を贖うために，人々は地面に倒れ伏し，腹ばいになって生前の罪を悔いている。教皇ハドリアヌス５世やフランス王祖ユーグ・カペーもここにいる。

第六の環道　貪食者　…おいしそうな果実をたわわに実らせた環道で，生前，暴食に明け暮れた者が，決して口に入らぬ果実を前にして，飢餓に耐えている。

第七の環道　愛欲者　…好色の罪にふけった者たちが，猛烈な火の中で清められている。ダンテが好色を最も軽い罪だと考えていたことは興味深い。

山頂　地上楽園　…美しい木々に覆われた楽園。ここは地上で最も天国に近い所である。ダンテによると，ここにはヤコブの妻レアもいるとされる。

（ヤコブの二人の妻のうち，ラケルは天国にいるのですが，レアは地上楽園にいるのです。なぜなら，大グレゴリウス『道徳論』第６巻[5]によれば，ラケルは観想的生活を，レアは活動的生活を代表しているからです。観想とはもっぱら神を愛することであり，活動とは隣人を愛することです。マタイ福音書の22

5) Gregorius I Magnus, *Moralia,* VI. 37.

章34-40から，観想は隣人愛よりもより大きな功徳のある行為だと考えられていました。）

５．煉獄はなぜ誕生したのか

それでは「煉獄」という思想あるいは世界観は，聖書には書かれていないにもかかわらず，キリスト教世界である西ヨーロッパにおいてなぜ誕生したのでしょうか。フランスの歴史学者ジャック・ル・ゴッフは古代から14世紀にいたる煉獄誕生の歴史を詳しく調べています。そこで以下では主にル・ゴッフの『煉獄の誕生』[6]という本によりながら，煉獄という思想が生まれた背景を考えてみたいと思います。

第一に言えることは，人間は死んだらそれでおしまい，天国か地獄かどちらかに決まってしまうというだけでは，人々は満足できなかったということです。生まれてすぐに死んでしまった子どもたちはどうなるのか。あるいは，生涯にいくつか罪を犯して，その罪を教会に告白することなく死んでしまった魂はどうなるのか。あるいは，キリスト教徒以外にも立派な人々は当然数多くいるわけでありまして，中世の教会でも非常に尊敬されていたプラトンやアリストテレスなどの古代ギリシアの哲学者たち，あるいはイスラム教徒でもサラディンという知恵のある王様などはキリスト教世界でも尊敬された人ですが，彼らはキリスト教徒でないというだけで，地獄で永遠に苦しむことになるのか。

すでにユダヤ教黙示文学（エチオピア語『エノク書』）の中に，最後の審判以前に死者たちの魂が留め置かれる世界が描かれており，そこでは死者たちが四つの等級に分けられて，審判のときを待っているとされています[7]。キリスト教でも，３世紀の『パウロの黙示録』という外典文書には，地獄の魂が，その責め苦を軽減される様子が書かれています[8]。

---

6) ジャック・ル・ゴッフ『煉獄の誕生』（渡辺香根夫訳）法政大学出版局 1988 年。

7) 「エチオピア語エノク書」17 章，『聖書外典偽典 4』旧約偽典Ⅱ，教文館 1975 年，187 頁。ル・ゴッフ 47 頁参照。

8) 「パウロの黙示録」『聖書外典偽典 6』新約外典Ⅱ，教文館 1976 年，272 頁以下，『新約聖書外典』聖書の世界別巻３新約Ⅰ，講談社 1974 年，291 頁以下。地獄については，「パウロの黙示録」31 章～44 章，特に 44 章参照。

ですから，死後の世界にもある程度の変化の可能性があるのではないか，生前の罪が多少は赦されたり，軽減されるかもしれない，という思想が，すでに古代の末期ごろからユダヤ教・キリスト教の中に生まれていて，それが後の煉獄思想の成立の母胎になったということであります。

このような死後の赦しという思想は，アレクサンドリアのクレメンス150-215，およびその学派であるオリゲネス185-254において頂点に達しておりまして，特にオリゲネスにおいては，最終的にはすべての魂が救済されるとされます。オリゲネスの思想はこの万人救済説のゆえに，後の教会 ── 西方教会では特にヒエロニムス ── からは否定されてしまうのですが，その影響は残り続けて，それがやがて煉獄の教えにおいて全面的にではないものの復活したのだと言うことができます。

アウグスティヌス356－430は，ル・ゴッフによれば，後世の煉獄思想の直接的な父だとされています。彼は，キリスト教徒以外の者，すなわちカトリック教会の洗礼を受けなかった者が（幼児を含めて）天国に行くことは否定しているのですが，しかしキリスト教徒で自分の犯した罪について生前に教会で悔い改めた者は，死後にいきなり天国に行くことはないにしても，何らかの浄罪にあずかる可能性があることを認めています。しかし総じてヒッポ司教アウグスティヌスにおいては，牧会的な理由があると思われますが，罪の赦しよりも裁きの方を強調する傾向があって，死後の救いの可能性に期待することなく，この世にいる間にいち早く悔い改めること，そして正しい生活に立ち戻ることを要求しています。死後の刑罰についても，アウグスティヌスは，刑罰に二種類あることは認めているのですが，つまり永遠の滅びのような懲罰的な刑罰と，罪を償いそれによって救われるための言わば教育的な刑罰（浄罪）があることを認めているのですが，その教育的な刑罰にしても，彼はそれが非常に苛酷なものであることを強調しています[9)]。

そもそも煉獄思想というものは，神さまの最終的な審判までにはまだ時間的余裕があるという世界観を前提しておりますので，アウグスティヌスのような，

9) ル・ゴッフ 104 頁参照。

現世の状態について非常な危機感の中に，終末論的に生きていた人は，死後の世界における敗者復活戦のようなものには，あまり深い関心を払っていないということができます。

煉獄思想が誕生した第二の理由は，生きている人々がある意味で死者たちと共に生きることを欲したからであります。死んだ人々のために何かしてやりたい，何かできることはないだろうか。それが死者たちのためのとりなしの祈りであり，贖罪のための施しでした。

この考え方はすでにアウグスティヌスにもありますが，これを多くの人々にも分かりやすい仕方で広めたのは，中世初期のローマ教皇で，後の中世のカトリック教会の礎を築いたとされる大教皇グレゴリウス Gregorius I Magnus c.540-604 でした。彼は『対話』（Dialogi）という書物の中で，次のような例話をひいて，小さな罪については死後に，現世の人々の祈りのとりなしによって救われることを物語っています。

ローマの助祭パスカシウスは，謙遜な生涯を送り，人々に施しをした立派な人物であったが，498年から505年まで（グレゴリウスの約100年前），正統派の教皇シュンマクスに対して対立教皇ラウレンティウスが立ったときに，ラウレンティウスを支持するという過ちを犯した。パスカシウスが亡くなって後，カプアの司教ゲルマヌスがアウグロンというところの浴場に湯治にでかけたとき，ゲルマヌスはその浴場の使用人の中に，パスカシウス（の亡霊）を見つけて驚いた。あなたはここで何をしているのか，とゲルマヌスがたずねると，パスカシウスは「自分がこの懲罰の場所に送られたのは，わたしが唯一犯した過ち，偽教皇ラウレンティウスを支持したためである。どうか私の罪のために祈っていただきたい。そしてあなたがもう一度ここに来られた時に，私がいなかったら，私は救われたと思ってください」と答えた。ゲルマヌスは熱心な祈りを捧げ，数日後に戻ってみると，パスカシウスはいなかった[10)]。

10) *Dialogi*, IV, 42. ル・ゴッフ 137 頁参照。

もうひとつの例は，グレゴリウス自身の体験談であります。

グレゴリウスの以前司牧していた修道院に，ユストゥスという医術にたけた修道士がいた。彼は真面目な修道士であったが，自身が重病にかかって死を前にしたとき，自分の肉親（兄弟）であり，医師でもあった修道士コピオススに，自分は金貨を３枚持っているということを打ち明けた。その金貨は，薬の包みの間に隠してあった。グレゴリウスはコピオススからその報告を受けてひどく驚いたが，ユストゥスの救いのために，また他の修道士たちの教育のために，次のように命じた。すなわち，他の修道士には，ユストゥスが会いたいと言ってきても，会ってはならないということ，そしてコピオススからユストゥスに，修道士たちは彼が修道院の規則を破って金貨を隠していたことを知って，彼を軽蔑している，と伝えさせた。死を前にして，悔い改めさせるためである。そして彼が死んだとき，グレゴリウスはその死体を修道士たちの墓地には埋葬させず，掃き溜めに投げ捨てさせ，修道士たちはその上に３枚の金貨を投げつけて，「お前の金を地獄の道連れにするがいい」と叫ばせた。この厳しい処置は，修道士たちを恐れさせ，修道院の風紀は改まった。ユストゥスが死んで30日目，グレゴリウスは憐れなユストゥスのためにミサをすることを提案し，それから毎日，修道士たちは彼のためにミサを行った。更に30日が過ぎて，コピオススの夢にユストゥスが現れ，今日まで自分は苦しみぬいてきたが，たった今，赦されて地獄の苦しみから免れることができたと語った。ユストゥスの遺体は掃き溜めから墓地に埋葬し直された[11]。

これらの物語の中には，死者の魂のために生者が祈るということ，死者のためのミサ（礼拝）が行なわれて，それが死んだ人々の彼岸における状況を改善するという思想がはっきりと現れています。煉獄という言葉はまだ使われていませんが，何かそのようなものを予想させる，死後の世界観が姿を現しつつあると言ってよいと思います。

---

11) ibid. IV, 57. ル・ゴッフ 139 頁参照。

６．煉獄思想が中世に一般化した理由

以上，ジャック・ル・ゴッフによりながら，煉獄思想の基礎が古代末期から中世初期（７世紀）にかけて準備されたことを述べたのですが，しかしそのような基礎あるいは萌芽がすでに存在したということと，それがなぜ後に12世紀の中世社会において急に受け入れられ一般化したのか，そして明確に「煉獄」という名前さえつけられて（煉獄 purgatorium という名称は，ル・ゴッフ（556頁）によると1270年と1280年の間に誕生したと推測されています），強く信じられるようになったのか，という問題は，もちろん別であります。

煉獄思想が定着した理由につきまして，ここでは二つのことを申し上げたいと思います。ひとつは歴史的・社会的な理由であり，もうひとつは思想的・哲学的な理由です。

①　歴史的・社会的理由

すでに述べましたように，12世紀という時代は，キリスト教が西欧社会に本格的に根付いた時代であり，人々の社会生活の隅々にまでキリスト教が行き渡った時代だということができます。別の言葉で言えば，12世紀は，西欧の中世社会，西欧型の封建社会が完成した時代です。大きな町にのみならず小さな村社会にも，ヨーロッパの津々浦々に教会堂が建てられ，教区教会制度が整備されました。すなわちすべての人々が（唯一の公認の異教徒であるユダヤ人を除いて）身分の上下に関わらずどこかの教会の一員になるということが始まりました。カトリック教会の七つの秘跡（sacramenta），すなわち洗礼，堅信礼，聖餐式，告悔，結婚，終油，叙階という儀式が制度化され，教会の鐘楼の上では鐘が鳴り響き始めました。つまり人々は，教会の鐘の音によって一日を区切られて生き，日曜日ごとの礼拝に区切られて一週間を生き，クリスマスや復活祭，聖霊降臨祭，収穫感謝祭，地方ごとの聖人の祝日などに区切られて一年を生き，洗礼から終油までの七つの秘跡に区切られて一生を生きるようになったのであります。

つまり12世紀は，キリスト教がそれまでの西欧社会と合体し統合した時代で

あります。それは，キリスト教が人々の心の隅々にまで浸透したということと同時に，キリスト教自身が，人々の心にそれまでずっとあった信仰に合わせて，ある程度モデルチェンジをしたということでもあったのです。

それまでの古いヨーロッパの人々は，血のつながりの中に生きていました。血族社会です。そこでは親族が力を持ち，人々は家族や親族の中に生き，家長や一族の長の決定に従って，財産を相続し，結婚をし，戦争に赴いて戦ったりもしたのです。そういったゲルマンやケルトの古い社会の数々の掟は，中世前期の長い歴史の中で大幅に壊れてきてはいたのですが，人々の心の中にはまだ色濃く残っていたと考えられます。

血族社会というものは，ある意味では生者と死者が共に生きる社会でもありました。一族というものは，死者たちによって結び合わされた集団であるからです。五代も六代も昔の共通の祖先によって，私たちは同じ氏族の人間として結び付けられています（13世紀初めのインノケンティウス３世の勅令によれば，６代以内が近親であって，相互の結婚が禁じられています）。ですから血族社会は，先祖を大切にする社会でもあります。

私はこの講義の最初に，ハローウィーンのお話しをいたしましたが，それは11月の初め，冬の始まる季節に，死者たちがこの世に帰ってくる，というケルト族の古い信仰から来たのでした。そこで表わされているように，死者たちは，一方では恐ろしい存在でもありましたが，他方では生者に多くの恵みを与えてくれる存在でもあったのです。そもそも死者たちが世を去ってくれたおかげで，生きている者たちの社会は成立しています。中世初期の社会は，あまり大きな経済発展のない社会でありましたから，年長者が死んでくれないと，孫たちの世代は結婚することもできません。一定の土地で生きられる人間の数は決まっていたからです。中世前期は大体において男性の結婚年齢は高く，30歳頃まで独身者が多かったと言われます。一方，女性は13歳から15歳頃に婚約し，結婚するのが普通でした。これもまた，生産性の低い，経済的発展の少ない社会から由来しています。

パトリック・ギアリによりますと，中世初期の社会には，死者との贈与交換

の習慣があったと言われます[12]。死者から土地や財産や名前（その名前に関わる人間関係も含めて）を譲ってもらったお返しに，生者は死者をお祭りし，死者のために祈るのです。

煉獄という教会の新しい教えは，このようなゲルマンやケルトの古い社会をキリスト教の中に取り込むために，非常に有効であったということができます。教会はそれ自体がお墓でもあり，また広大な墓地を抱えてもおりましたから，人々は先祖を祭るために教会に集い，彼らのために祈ります。ではその死者たちの魂はどこにいるのか。彼らの多くは今はまだ天国でも地獄でもない第三の場所，煉獄にいて，生者たちが自分のために祈ってくれるのを願っている。その教えは，人々の心に大きく訴えるものを持っていたのであります。

カトリック教会では，この死者たちのための記念日を，11月２日としておりまして，11月１日が諸聖人のための記念日，万聖節 All Saints' Day, Allerheiligen であるのに対して，「万霊節」All Souls' Day, Allerseelen と呼んでいます。それは11世紀半ばに，クリュニー修道院で始まったお祭りであります[13]。

② 思想的・哲学的理由

煉獄が12世紀に一般化した第二の理由は，思想的・哲学的なものだと思われます。これについては詳しく述べませんが，スコラ哲学がこの頃に隆盛して，罪とか罰について概念的に厳密に考えるようになった結果，現世で償い切れなかった罪の罰は，どこかで償わねばならず，それをしないうちは天国に行く，つまり神さまを直接に認識することはできない，と論理的に考えられたからであります。大罪とか小罪といった罪の軽重が認識されるようになり，またその罪とは本質的には何であるのかが厳密に考えられれば考えられるほど，小罪すなわち赦され得る罪 peccatum veniale については，死後においてどこかで償いの機会がなければならないと考えられた，というわけです。

もちろんそれだけでは，「煉獄」が存在することの証明にはなりませんけれ

12) パトリック・ギアリ『死者と生きる中世――ヨーロッパ封建社会における死生観の変遷』白水社 1999 年，80 頁。
13) ル・ゴッフ『煉獄の誕生』185 頁。

ども，煉獄の可能性を示すことにはなります。以下に示すトマス・アクィナスのテキストは，そのことを語っております。魂は浄められなくては，神さまにお会いすることができない。だからそのための場所として，「煉獄があると私たちは考える」haec est ratio quare Purgatorium ponimus（煉獄を私たちがあるとする根拠はここにある）というのです。

とはいえ善人の側からして，身体から分かれた霊魂が直ちに最終的な報酬 merces，すなわち神を見ること（見神）に存するところの報酬を受けることがないような，何らかの障害 impedimuntum がありうるということが考慮されねばならない。というのは，そのような見神に理性的被造物が高めらるのは，それが完全に清められることなしには不可能であるからである。かかる見神は被造物の自然的能力の全体を超え出ているからである。それゆえ，『智書』７章25節には，知恵について，「汚れたものは何ひとつそれ（知恵）の内に入ることはない」と言われており，また『イザヤ書』35章８節には，「汚れた者がそれ（道）を通ることはない」と言われているのである。

しかるに，霊魂は罪によって，秩序に反してより低いものに結び付けられる限りにおいて，汚染される。確かに霊魂は，すでに述べたように，現世において，悔悛やその他の秘跡によって浄化される。しかし他方，何らかの怠慢のゆえにか，あるいは多忙のゆえにか，あるいはまたその人が急死したかにより，こうした浄化が現世で全面的に完成されないときには，なおも負うべき罰が残ることになる。とはいえ，このことのゆえに全面的に報償から除外されるに相当するわけではない。なぜなら，第３巻で言われたことから明らかなように，こうした事態は大罪 peccatum mortale なしにも起こりうるのであるが，永遠の生命という報償がそれにふさわしいところの愛徳は，大罪によってのみ取り去られるからである。

それゆえ，現世の後，最終的な報償に至るよりも前に，霊魂は浄められる purgentur 必要がある。しかるにこの浄罪 purgatio は，ちょうど現世においても償罪的な罰によって十分な浄罪があったように，罰によって生じる。さもなければ，すなわちもし彼らが現世で罪のゆえに償うことがなかった罰を

将来においても受けることがないならば，怠慢な者たちが注意深い者たちよりもよりよい状態に置かれることになる。それゆえ，現世において何か清められるべきことがらの残った善人の霊魂は，浄化の罰を受けてしまうまで，報償という結果を得ることを引き伸ばされる。われわれが煉獄（浄罪界）があるとする理由は，このことである[14]。

7．煉獄の崩壊

以上，私たちは「煉獄」という世界観が中世において生まれてきた原因と，それが12世紀において人々の間に一般化した理由について考えてきました。最後に私は，煉獄思想の崩壊について述べなければならないのですが，それについて十分な議論をする材料は私にはまだありません。「煉獄」の教義は，現代もカトリック教会において否定されたわけではありません[15]ので，それはまだ「崩壊」したわけではない，と考えることもできます。しかしここでは簡単に，

---

14) Thomas Aquinas, *Summa Contra Gentiles*, lib. 4 cap. 91 n. 6　Considerandum tamen est quod ex parte bonorum aliquod impedimentum esse potest, ne animae statim a corpore absolutae ultimam mercedem recipiant, quae in Dei visione consistit. Ad illam enim visionem creatura rationalis elevari non potest nisi totaliter fuerit depurata: cum illa visio totam facultatem naturalem creaturae excedat. Unde Sap. 7-25, dicitur de sapientia quod *nihil inquinatum incurrit in illam* et Isaiae 35-8, dicitur: *non transibit per eam pollutus*.

Polluitur autem anima per peccatum, inquantum rebus inferioribus inordinate coniungitur. A qua quidem pollutione purificatur in hac vita per poenitentiam et alia sacramenta, ut supra dictum est. Quandoque vero contingit quod purificatio talis non totaliter perficitur in hac vita, sed remanet adhuc debitor poenae: vel propter negligentiam aliquam aut occupationem; aut etiam quia homo morte praevenitur. Nec tamen propter hoc meretur totaliter excludi a praemio: quia haec absque peccato mortali contingere possunt, per quod solum tollitur caritas, cui praemium vitae aeternae debetur, ut apparet ex his quae in tertio dicta sunt.

Oportet igitur quod post hanc vitam purgentur, antequam finale praemium consequantur. Purgatio autem haec fit per poenas, sicut et in hac vita per poenas satisfactorias purgatio completa fuisset: alioquin melioris conditionis essent negligentes quam solliciti, si poenam quam hic pro peccatis non implent, non sustineant in futuro. Retardantur igitur animae bonorum qui habent aliquid purgabile in hoc mundo, a praemii consecutione, quousque poenas purgatorias sustineant. Et haec est ratio quare Purgatorium ponimus.

15) 『新カトリック大事典Ⅳ』研究社 2009 年，「煉獄」および「リンブス」の項参照。

プロテスタントの立場から自分の考えを述べておきたいと思います。

煉獄という考え方が否定されるに至ったのは，マルチン・ルターの宗教改革によるという見方がプロテスタントでは一般的です。ルターが煉獄を否定した論拠は，簡単に言って二つあります。ひとつは，煉獄には聖書的根拠がないということで，それについてはすでに述べました。そしてもうひとつは，煉獄にいる死者たちの状況を生者の祈りが改善するという思想を利用することによって，カトリック教会は死者たちを人質にして人々からお金を絞り上げてきたということ，つまりカトリック教会に対する強い批判でありました。死者のためのミサを挙行したり，高額の贖宥状を販売したりする。それは確かに，16世紀においては特にマインツ大司教座をめぐる取引と関わって，カトリック教会が金もうけをする手段になっていました。ルターによる批判の結果，今日では，カトリック教会でさえも，煉獄ということはあまり言いません。私は，宗教改革が煉獄思想の息の根を止めたということに反対するわけではありませんが，しかしここではむしろ，中世末期において，煉獄という考え方を支えていたものがすでに崩壊し始めていた，ということを強調したいと思います。ルターはただ，その結果を収穫したにすぎないのです。

ここでも，社会的背景と思想的背景に分けて考えたいのですが，先ず煉獄思想の崩壊の社会的背景について申しますと，中世の末期に崩壊したもの，それはある意味で中世社会そのものでもあったのですが，それは「生者と死者の共同体」というものだったと思います。そしてこの崩壊の直接的原因とまでは言えないかもしれませんが，その大きなきっかけになったのは，14世紀半ばのペストの大流行だったというのが，私の主張です。

1347年から1350年にかけて，ヨーロッパ全土を襲ったこの疫病については，これまでにも多くの研究がなされてきたのですが，まだよくわかってないことも沢山あります。たとえば，今日一般的には，この病気はペスト菌によるものとされているのですが，それはずっと後の1894年に香港で疫病が発生したときに，フランスのイェルサンと日本の北里柴三郎がそれぞれ独立に病原菌を発見いたしまして，そのペスト菌 Yersinia pestis が，14世紀の半ばの大流行の原因でもあったとされたことによります。しかしペスト菌が14世紀のペスト（疫病）

の原因であったとするには，不自然な点も多いのです。たとえば14世紀の流行については，ネズミの大量死ということは全く報告されておりませんし，ネズミが流行の原因だとすると，ペストがヨーロッパ中に広がった伝播の速度が説明できないといいます。あるいは，体中に黒い斑点や黒い腫れができてもがき苦しみながら死んでいったという，14世紀に「黒死病」という別名の元になったような深刻な症状は，近代のペスト菌の被害では，比較的稀（それはよほど重症になってから）だということもあります。ですから今日では，ペストの原因は，ペスト菌とはまた別の，たとえばエボラ出血熱のようなウイルスによるとする説や，あるいは複数の原因を考える人々もいます[16]。

原因はとにかくとして，歴史的な事実としては，1347年春に東ヨーロッパにおそらくアジアから上陸したペストは，その夏にはコンスタンティノープル，続いてイタリア南部，1348年春には北イタリア（ヴェネツィア，フィレンツェ），フランスのマルセイユ，ボルドーなどの港町，アヴィニヨン，その夏にはパリ，間もなくスペイン，イングランド，ほぼ同時期にドイツ各地，1349年にはポーランド，1350年にはデンマーク，スウェーデンなどスカンディナヴィア諸国に広がりました。ヨーロッパではずっと北方のアイスランドだけが無事だったのですが，そのアイスランドでも50年後の1402－04年に大流行して，結局ヨーロッパ全土でペストの被害を免れた土地はひとつもありません。当時のヨーロッパの人口は，約6000万人と見積もられておりますが，そのおよそ三分の一，約2000万人がこの1350年前後のペストによって死亡したと言われるのです。地域によっては住民の半分とか，逆に三分の二が死亡したところもあります。

ひとつの疫病が，社会の三分の一も滅ぼしてしまう。この巨大な災害が，どのような変化をその社会にもたらすのか，それは私たちの想像を超えるところがあります。しかもこの病気は，その後もヨーロッパ社会に残り続けて，ことあるごとに小さな流行を繰返して人々の不安を掻き立てたのです[17]。

---

16) W. Naphy, A. Apicer, *Der Schwarze Tod, die Pest in Europa*, S. 52ff.

17) 1664 年にロンドンを襲ったペストでは，人口の 6 分の 1 が死亡したと言われる。ダニエル・デフォー『ロンドン・ペストの恐怖』小学館 1994 年は，小説であるが，記録文学としての要素も強い。

このペストが直撃したのが，中世の「生者と死者の共同体」でありました。それは直接的に共同体を，とりわけ都市の共同体をゆさぶりました。ボッカッチョ1313-75はこの疫病の流行を目撃した証人ですが，その『デカメロン』の第一日には，次のように書かれています。

「私たちの都市（フィレンツェ）がこうした苦痛と悲惨に沈んでいる時，宗教的と俗界的の区別なく，法律の権威は，法律の役人や執行者が他の人々と同様に，みな死ぬか，罹病するか，あるいはどんな事務もとれないほど下役人の手が足りなくなるかしたために，ほとんど地に落ちて，全く無力になってしまいました，だから，誰もすき勝ってのしほうだいで，とがめられることなどありませんでした。……一人の市民が他の市民をさけ，ほとんどだれも他人のことをかまわず，親戚はまれにしか，あるいは全然訪問しあわなかったことは申しあげないことにいたします。また随分前から，この憂苦が男たちや女たちの胸にはいった時に，ひどい驚愕をまきおこしたために，一人の兄弟は他の兄弟をすて，伯父は甥をすて，姉妹は兄弟をすて，またしばしば妻は夫をすてるにいたり，また（あまりなことで，ほとんど信じられないことですが），父や母はこどもたちを，まるで自分のものではないように，訪問したり面倒をみたりすることをさけました。」[18)]

他にも多くの証言がありますが，ペストは中世の封建社会を，一時的にではありますが完全に破壊したのです。封建社会とは，親から子どもへと土地や財産や生産手段などがすべて受け渡される社会です。親が子どもを愛して，人間関係を含めて自分の持つすべてを譲ってゆくということと，子どもが親を愛して老後の世話をし，亡くなったあとも「死者を記念するミサ」などで感謝しつづけること。この封建的互酬関係にもとづく「生者と死者の共同体」意識が，中世の人々の心の安定を生み出していました。ペストによって一旦ズタズタにされたのはこの関係でした。ペストの後にも封建社会は続きますので，やがて秩序は回復しますが，人々の心が完全にもとに戻ることはありませんでした。罪悪感と「仕方がなかったのだ」という自己正当化の間で，後期中世の人々の

18) ボッカッチョ『デカメロン』上（柏熊達生訳）ちくま文庫 1987 年，24 頁。

心は揺れ動きました。

もうひとつ，ペストが破壊したのは，カトリック教会の教えへの信頼であったと思います。煉獄の教義もそのひとつであったのですが，西欧中世の社会が様々な矛盾をはらみながらも破綻しないで維持されたのは，カトリックの教義が大きかったと思います。この地上での生活が，私たちのすべてではないこと，その先にはるかに長い永遠があるのだということ。つまり私たちの地上での須臾（しゅゆ）の生は，死後の煉獄や天国のための準備期間に過ぎないこと。地上で苦しい生活を余儀なくされたとしても，その償いは来世で十分つけられるということ。教会と子どもたちが自分たちを覚えて祈ってくれる限り，死んだのちも希望が絶えることはないこと。このような教えが，身分制の中で暮らしている人々に心の安定をもたらしていました。

ところがペストは，その教義への信頼を大きく傷つけました。病人の死に方の悲惨さ，司祭の死亡率がかえって高かったこと，また教会の祈りが疫病に対して無力であったことなどが，原因であったと思われます。それがただちに暴動や革命などの体制否定につながったわけではありませんが，それは地中のマグマのように，封建社会を脅かしていきます。ホイジンガの『中世の秋』によれば，後期中世の人々は，現世的喜びの追及と過度に敬虔な信仰的態度の両極に揺れていたといいます[19]。この後期中世から近代にかけての変化については，しかし稿を改めて考えてみたいと思います。

煉獄の教義は，「生者と死者の共同体」としての中世社会を象徴するものでありましたが，それは先ず都市部で，次いで長い時間をかけて農村部でも，社会的意味合いを失っていったのです。

---

19) ホイジンガ『中世の秋』第 13 章。拙論「『中世の秋』を生きた教会の希望」西南学院大学神学論集第 70 巻 1 号 139 頁参照。